

千葉県三童話全集

(第二巻)

月報 2

目次

わらべの会と無花果……………茶木 滋(一)
千葉県三先生と私……………平林武雄(二)
イチジクの味……………柴野民三(四)
雑誌「童話」を読んだ頃……………日高六郎(六)
千葉県文学のふるさと(一)……………池田春子(七)

東京都文京区

水道 1-9-2

岩崎書店



コドモ社時代 大正12, 3年ごろ

雑誌『童話』のころ(一)

雑誌『童話』のころ、荻窪にあった千葉家には、当時の読者である子供たちが、千葉県三をしたってよく集まった。そしてそのうちのあるグループは少年期からひきつづいて千葉県三と接し、人生を語り、文学を語って成人していった。このグループは虎ちゃん会と称し今なお健在である。およそ、40年も以前、少年時代に千葉県三の人と作品を知り、その感銘を今もって大切にしている人々は実に多い。この号では、当時からの愛読者の方々に、千葉県三の人と作品との出会いについて思い出を語っていただいた。

わらべの会と無花果

茶木 滋

千葉さんが、コドモ社に入社されたのは、大正5年の末ごろのこと、……とのことである。と、すると、その頃、僕は小学一年生で、丁度、雑誌「コドモ」を読みはじめ、続いて「良友」それから「童話」へと、学年と共に読み進んでいった。もちろん、その頃出ていた「幼児の友」とか「譚海」「少年倶楽部」また「赤い鳥」「金の星」などもしきりに読んでいたわけだが、投書というタノシミを知ったのは「良友」がはじめであった。

投書のタノシミと申しても、粗製乱作、力不足の僕などにはなかなか作品はのらず、その大半は名前だけが頁の片すみになる選外佳作の、イワユルその頃のコトバでいえば「名ダケ派」であった。

思えば「良友」から「童話」「童話文学」そして昭和10年の「児童文学」に至るまでのながい年月、ずいぶんと僕は、僕の稚拙な原稿と共に、千葉さんのゴヤツカイになったことである。そして、現在でも一月五日になると、昔のようにゴヤツカイになっている。と申しても、これは原稿ではなく、この日は奈



千葉省三氏(右) 茶木滋氏(左)。昭和42年5月

街三郎さんや、関英雄、柴野民三、平林武雄、僕など、ごく少数の者が「虎ちゃんの会」ということで年に一回、千葉さんのお宅を訪ね、千葉さんの昔ながらの温顔に接し、温情にひたりながら、たつぷりと酒肴をごちそうになり、僕はいつも、だらしない酔っぱらってしまふからである。虎ちゃんの会といえは、すぐ、その昔の「わらべの会」のことが想いのぼれる。

あれは昭和4年の春ごろ、たしか、島田忠夫さんなどの学のことよりもむしろ、千葉さんに接しての、それぞれがきびしい人間のペンキョウをしたということであった。妙な話だが、僕はこの「わらべの会」で、はじめて、イチジクは、もとの方からクルッと皮をむいて、そのままガブリとやった方がおいしいという食べかたを、千葉先生の奥さんに教えていただいた。

荻窪の千葉家の庭には大きなイチジクの木があり、その時、イチジクは夕日をあび、びっしり枝々にくっつき照り輝いていた。そのイチジクを枝からもちで、奥さんが、僕たち少年にわ

けてくださった。

この日のイチジクの美味は、いまでも僕の舌の記憶にある、あれや、これや、千葉さんとのフレイアイを心愉しく思っている、きりがない。それはまるで遠い昔の祭の日にきいた笛太鼓の音にも似てなつかしい。

千葉家のすぐ前に住んでおられた川上四郎さんの「荻窪だよ」、それからあの口絵やさし絵も忘れられない。

また、読者(投書家)が「童話一家」というフニキでお互いに語りあった「通信欄」。その「通信欄」であばれた斬捨丸(奈街三郎)の卒直小感と称する作品批評など、あの頃の雑誌「童話」は、たしかに千葉省三と共にあった。(児童文学者)

千葉省三先生と私

平林武雄

大正十一年、小学六年のころかと思う。私の住んでいた大崎桐ヶ谷の小さな古本屋に『童話』という名の古雑誌が十冊あまり積んであった。

その表紙はユニークな想像的童画で、即座に私の目をひきつけ、私はひと山そっくり買って帰った。

開いてみると絵は川上四郎、童話は藤森秀夫。その中に原色版折込みの絵に「月がひとり、空をうろうろ……」という童話のついたものもあった。

空をうろうろというあやしい月。その新風の絵と童話。私は胸がふるえて気も遠くなるほどだった。

私の一生に浪漫情調の力強い一刷毛を掃いたのは、あのひと

印象はさわやかだった。

主人公の映像もさることながら、幕切れまぎわに登場し、忽然と退場する小学校の先生の残像が何か鮮明だった。

荻窪の千葉家に伺ったのは、ずっと遅れて昭和五年ごろかと思う。お宅は中央線の線路沿いで、駅からの道は深々と草が茂り、お宅の裏は雑木林だった。川上家と東西向かい合、共用の門柱が立ち、間取りも全く同じで、ただ四畳半が千葉家では書斎、川上家ではアトリエになっていたとか。

初めて会う先生は、小柄で口ひげを蓄え、言葉の端に北関東のなまりがあり、虎ちゃんの先生の面影も見えて、それが私の堅い膝をくずさせた。お子さんが四、五人、たのしそうに遊ぶ声もした――。

今は先生も七十歳を少し越えられ、とみに寛厚の長者の風を加えられた。この秋の日に伺うと床の間に源空と署した法然上人の書のかかっているのが拝見される、その前で私は、

「去年、ロンドンにしばらくいました、あちらの小学生が小熊のバディングトンという童話を評判にしていました。下宿の子に借りて私も読んで見ました。それは先生が三十年も前にハわんわんものがたりVで試みられたアイデアと同じようなものでしたよ」

などと報告した。

聞けばあの荻窪時代の小学生も立派に成人出世なさって、ご長男は東北大学教授を勤められ、つづく方々もそれぞれ学問を活かしてすぐれた活動をなさっていられるご様子。ご夫妻のご清福を祝さずにはいられない。(明治学院大学文学部長)



金蘭社版「わんわんものがたり」

山の古雑誌だった。

その雑誌の編集者は千葉省三。『童話』を購読したのは翌大正十二年の春からだろう。その年の十一月号に載った西条八十氏の『古い港』がまた新しい感動だった。関東大震災という社会の様相を一変した大事件を体験した私の少年らしい無常感幻滅感が、この高尚な童話に接して陰影こまかな形象をとり、美化され深化されたことを私は永く忘れまい。

『童話』に発表された千葉先生の作品は、そのつど愛読したものだが、はつきりと作者を認識して味わったのは『虎ちゃんの日記』だった。

適量の方言に過不足ない野趣を盛り感情も適正に抑制されて

イチジクの味

柴野民三

『童話』創刊号を店頭で発見したのは、私が小学四年最後の月の大正九年三月のある日だった。もちろん、千葉省三先生の編集になる雑誌などとは知るはずもない。しかし、当時の読者欄のことばでいえば「すっかり魅せられてしまいました」というわけで、廃刊までの愛読者となった。

創刊号の千葉先生の作品は『沙漠の宝』という、ふしぎな目薬を持った坊さんと欲深い商人の登場するアラビアンナイト？による再話で、『桃太郎の妹・相馬泰三』『ひもむすめ・浜田広介』『人買い船・北村寿夫』などとともに今でもさし絵までありありと思いうかべるくらいおぼえている。

千葉文学といえば、やはり『童話』の廃刊近くなってから発表された『虎ちゃんの日記』と『梅づけの皿』など一連の思い出の作品群であるが、十四、五歳の私にとって深く感銘したのは、後者の諸作品であった。

『童話』の魅力は、川上四郎先生の表紙とさし絵だったが、投稿欄があったこともその一つである。私もときたま投稿した。といっても、もともと絵がすきだったので、川上先生選の図画（自由画）を送った。五年生のとき、ハガキに墨絵の汽車をかいたのが賞になってからは、かなり多く誌上に刷り出されて気をよくしたばかりか、画家になろうかなどと考え出したものである。

童話や童謡の投稿もはじめたものの入選したのは北村寿夫氏



千葉省三氏（大正10年、コドモ社時代）

選で『紳士と子供』という童話ただ一篇きり。千葉先生選のときは、『乞食と園丁』というのを「おもしろく読みました」と選評で書かれただけだったが、これをいく度も読み返してうれしかったことか。

それは、『童話』廃刊前後のころだったかと思う。『街雀』という童謡同人雑誌を出そうとして、見本綴りを作り、表紙絵のご意見拝聴と荻窪の川上先生邸へ伺った。このとき、お向いの千葉先生にはじめてお目にかかった。が、決してはじめてのような気がしなかった。

というのは、『童話』誌上で川上先生が『荻窪だより』という絵入り随筆をつづけられていて、その中によく千葉先生がさし絵とともに登場されていたからである。



千葉省三夫妻（昭和35年）

オールバックでチョビ髭をつけられ、目のくりつとした童顔の先生は、川上先生のさし絵そっくり、お顔のとおりやさしいお人柄であった。そして「童謡誌のことなら酒井朝彦さんにおあいしなさい」と所番地まで教えてくださった。

それから、いく度か邪魔した。

初秋のある日、先生は、庭のイチジクの木にのぼられて、熟した実をいでこられると、東京生まれの私にたべ方まで教えてくださいくださった。

あまずつばくておいしかった。先生のお人柄を思った。

その後、先生が『わらべの会』という童話研究会をつくられたとき「君もきてみるといい」とお誘いを受け、一、二度出席した。

先生はいつもにこにこされていたが、作品批評はきびしかったようにおぼえている。

徴兵検査の年、私は、家業をすてて大橋図書館につとめた。はじめは、出納手からたたきこまれた。もめんの仕着せ服をきて歳下の中学生たちと書籍の出し入れにはげんだ。

そんなある日、茶色のトンビをはおられた千葉先生がたずねてこられた。食堂でコーヒーをごちそうになると、館の屋上にご案内した。先生は、コンクリートのふちに私と肩をならべられた。

その時の話はもうはつきりしない。けれど、勘当同様の私を勇気づけられ、文学の道のけわしさにくじけないように励まされたことだけは忘れていない。屋上の向うの皇居の堀ばたの枯草に松の緑が濃かった。（児童文学者）

雑誌『童話』を読んだころ 日高六郎

『童話』の創刊号から終刊号まで、ひとそろいの古雑誌を、私の兄の友人からもらったのは、私が中学生になったばかりのときだった。このひとそろいは、たちまち私の心をとらえ、童話と詩の世界への最初の道案内になった。つまかさねた古雑誌の高さをながめて、私はたいへんな蔵書家になったような気持ちで胸をわくわくさせたことを思い出す。

『童話』のなかで、まっさきに思い浮かんでくるのが、千葉省三の名前である。

それから、さし絵の川上四郎。童話では島木赤彦である。そうならべると、なにかそこに共通のものがあることがわかる。土におい、といったものであろうか。

私は中華民国の青島で生まれ、その日本人中学校にはいた。青島はドイツ風の美しい街で、道路はすべて完全に舗装され、各戸すべてに水洗便所がついていた。建築はドイツ風で、西欧の小都市のようだとわれていた。

ところで私の父は、日本の農村に生まれ、志をたてて東京に遊学し、それから中国へわたるという明治の人であった。洋風建築に住みながら、故郷をたえずなつかしがった。村祭りのたのしみや、お盆の夜のつな引きの行事を話してくれた。しかし私はもちろんそれを現実に見たことはなく、想像するばかりであった。青島の街の外には、中国の農民がいて日本の農民はいなかった。

そうした生活のなかで、私は日本の農村をあれこれと想像する。古風な父の考え方にも影響され、農本主義風の考え方にもひかれる。千葉省三の「虎ちゃんの日記」を、私はいくどとなく読みふけた。

そこには農村の風物、村にきた東京の子どもと農村の子どもとの出会い、家族のなかの日常の生活、学校、そして虎ちゃんの孤独と感傷と冒険、川のなかの小さな島での一夜。そうしたことが、いま三十数年をへて私の記憶によみがえる。そこに流れているペーソスにみちた農村少年の感情は、いまでもはつきりと思い出すことができる。

日本での都市化、あるいはいわゆる「大衆社会」現象のはしりは、大震災をはさんで進行していく。『童話』が刊行されたのは、ちょうどその時期だった。

そのころ都市生活の一部にみられるはなやかさと農村の貧しさとがきわだち、古いものから新しいものへの流動がはげしくなってきた。千葉省三にせよ、島木赤彦にせよ、川上四郎にせよ、農村の感情や、感覚の質をとらえようという努力がはじまったことは、こうした時代のなかでは必然のことだったと思う。

その後私はトルストイの民話をよんで、ロシアの農民の生活や心にもひかれた。ツルゲエネフの「獵人日記」も愛読した。貧しいということでは、日本の農民もロシアの農民もちがいはない。しかし、私にはやはりロシアの農民の生活や感情は、どこかハイカラに感じられた。

私は高等学校にはいるとき、はじめて日本にかえる。そし

て、私が父の故郷にかえったとき、そこで走りまわっている子どもたちが、千葉省三の虎ちゃんに似ていると思わないではいられなかった。

(東大教授・社会学)

千葉文学のふるさと(一)

池田春子



「鷹の巣とり」に出てくる
ダイシャクボウ山

千葉省三の文学は典型的な日本の農村を中心展開されるが、特に省三自身の故郷である栃木県檜木(鹿沼市)及び吉沢(今市市)附近は特に具体的な地名を伴って登場する。筆者は東京教育大学の学生であるが、卒業論に千葉省三論を選び、取材のため、檜木、吉沢を訪ねたものである。

(一) 野州の野

東武日光線檜木駅は小さな駅だった。日光行の特急列車がずっしりとした車体を光らせて通過してしまふと、あたりはもとのひっそりとしたいなかに戻る。駅前とはいっても申しわけに小店が二軒あるきりで、日光街道に向かってまっすぐのびる一本道の両側からは、もうすぐ稲田がひろがっている。

線路のむこうには低い山がうねうねと線路と平行に走り、(檜木の人は西と呼ぶ)山と線路の間も一面の田んぼ、稲田の中の小島のような農家——檜木までの車窓から見てきたのも同じような風景だった。田畑がつづき、ところどころに杉森、雑木林、野道にはスキの穂がゆれ赤マンマや野菊ものびやかに咲いている。背景には低い山なみがうす雲にばやけて濃

淡に重なっている。

——川上四郎画伯の描く絵そのままのおだやかな農村風景である。

「晴れてるとね、あそこんどこに男体山が見えるんだよ。白根も見える。……」

奥さんをとまなつて何年かぶりに帰郷するらしい男が熱心に説明している。萩原朔太郎は「まだ上州の山は見えずや」とうたったが、千葉省三にとって、ふるさととはまさにこの「野州の野」であるにちがいない。

(二) 檜木の宿

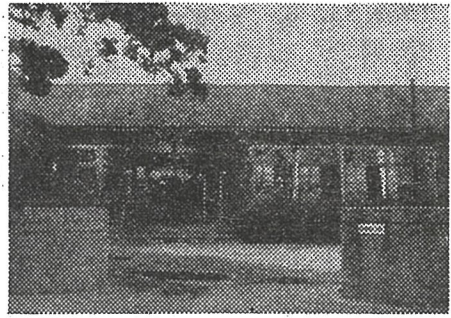
駅前の一本道を八分ほど歩くと旧日光例幣使街道に出る。今は壬生、栃木二方面から鹿沼へ抜ける幹線道路で車はみな通過していつてしまふが、江戸時代には日光裏街道と例幣使街道の合流点としてこの近辺では目立つ宿場だったという。紙屋の英ちゃんこと田中英雄さん(明治二八年生、ずっと教師生活をしておられたが、終戦を機に帰農しておられる)は快く案内してくださった。

街道に添って南北に八百メートルほど続く家並のまん中から少し北のあたりに大きな檜の木があったのでこの名がついたという古老の話だという。

街道は広く、両側に新旧入りまじった家並が続いている。大谷石造りの大きな蔵もある。

「まあ、こんなが昔のままですわな」

木の皮ぶきの低い屋根、白い障子、やはり低い二階のてすりは少しぐらぐらのようだったが宿のおもかげをとどめていると



現在の楡木小学校

いう。

本陣、衣屋、鍛冶屋、医者——次々と教えてくださったが殆どしもた屋になっていた。

「学校へ行くんならここの裏を通ってった方がずっと早いよ。」尻上りの野州ことばで言って、田中さんは一軒の農家と白い土蔵の間へひょいと折れた。庭先には刈りどった稲束が干してある。

「ごせいができますな。ちょっと前をお借りしますよ。」と言ってどんどん奥へ行く。小さな土蔵があつて、竹やぶがあつて、その影から寺のお堂が見えた。成就院がそれで、大きな赤しでの木があるのだそうだ。二度ほど曲ると目の前がひらけて、じきむこうに校舎らしい建物が見えた。「ずっと早いでしょうが。」

何だか田中さんもこの抜け道を教えるのが少しうれいのではないかという気がしてきた。作品で「みち」を思いだしたからである。

(三) 楡木小学校

玄関のガラス戸をあけると廊下兼ホールになっていて、その壁には生徒たちの作品の上に歴代校長の写真がかけてある。目を移していくと一番奥のところに威厳にみちた目で丸い眼鏡の奥からじっとこちらを見ている千葉亀五郎先生の像があつた。

千葉省三という童話作家のことで、と持ち出したが先生方は

御存知ないようだった。

一―三年は各一クラス、四―六年は各二クラスという小さな学校で、それでも最初は一棟だけだったのを建て増し建て増しして現在の三棟になったのだそうだから以前はもっと小さかったのだ。それも、千葉氏が尋常小学校に通っていたころにはこの場所ではなく、街道をはさんだ反対側、現在公民館のあるところにあつたのだそうである。

その頃学校の裏には観音寺という寺があつて（今でも墓地だけは残っている）そのお堂に「よしバカ」と呼ばれる女乞食がいたという。「虎ちゃんの日記」のお勝こじきや「安の話」のお梅こじきのモデルであろう。やはり父親は絵描きだったが死んでしまい、村の人たちが輪番でめんどろをみていたそうだ。火事を出してお堂を焼いてしまつてからは小屋を作つて住んでいたという。……つづく。（東京教育大学・学生）

〈新装版の読者へのお断わり〉

この月報は、初版発行時に挿入されていたものです。ですから、執筆者のなかには鬼籍にはいられた方もいますし、勤務先、肩書が現在と変わっている方もいます。そのことをお断わりします。

なお、初版第一巻の刊行は昭和四二年十月で、以後、巻数順に毎月一冊出版され、昭和四三年三月に全六巻が完結しています。

（岩崎書店編集部）